

培った経験 手引書に

ここにいるよ

沖縄 子どもの貧困

第5部 先進地に学ぶ 〈6〉

京都山科醍醐 子どものひろば

京都市の中心、京都盆地から山を隔てた東隣の山科盆地。山科地区は伝統的離散地帯を合わせ、約10万人が暮らす。そのうち約3万人が18歳以下の子ども。

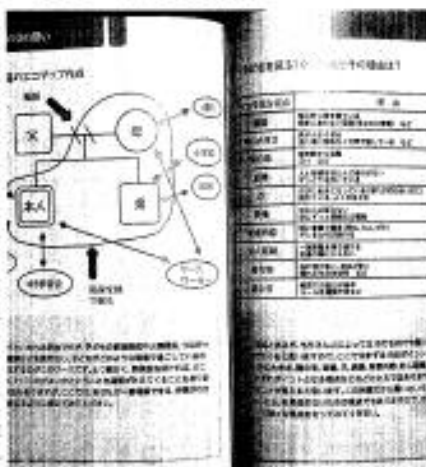
NPO法人山科醍醐子どものひろばは1980年代に発足し、演劇鑑賞などで活動してきた「親と子の劇場」が前身。2000年、NPOに移行後、地域のニーズに応じて子育て支援や子どもの貧困対策などに活動の幅を広げてきた。商店街と連携し、空き店舗を活用して子どもの夜の居場所「トワイライトスライ」をつくるなど、全国でも先駆的な活動で注目された。

現在は地域で300Kのマンションや一口建てを借り、少人数での「トワイライトスライ」を運営。毎年小中学生約20人を支援する。子ども1人が専有できる十分なスペースを確保。マンツーマンでかくさポーターが一緒に「遠慮」し、夕食を食べるなどしながら日常生活や学習などの相談に乗る。

理事長の村井球哉さんは「地域に暮らすすべての子どもが豊かに育つてほしい」というのが原点。その最低限の部分を保障しようとする、どうしても生活支援が必要なケースが出てくると説明する。

現在も演劇やキャンプなどの文化、体験活動に力を入れていくが、「そこになかなか参加できない子どもがいる。特別な体験の

それぞれの子見守り続ける



「子どもの貧困対策に地域で取り組む支援者のアクションサポートBOOK〜とのまき〜」の1ページ

前にもう必要な。生活、を聞けるという。地域の全ての子を対象にしたユニバーサルな活動と、特定の子どもへの支援を並立させている。

村井さんは「どがった方がいいかは、経験するのは行政の仕事。民間の活動は自宅の前の道で転んだ子の手当てくらいしかでき

域や社会の現状を確認したりできるような工夫を凝らしている。困り事を抱えた子どもを助けるための「10の視点」として、服装や目録、爪、対人距離、持ち物、遊び方などの注意点を明示。ほかにも行政や学校、地域とのつながりや「これからは子ども支援を始めようとする団体の参考になる情報が多く載せられている」。

培ってきたノウハウを各地の取り組みに生かしてもらうため今年4月、支援者向けの「手引書」『支援者のアクションサポートブック〜とのまき〜』を総刊した。活動がどこを担うのか、人やお金をとどう集めるかなど「実践への10の問い」を設定。コピーして使えるワークシートが付き、具体的な子どもや家族の状態などを書き込んだり、地

「続けられ続けるほど、課題の難しさが増していく。子どもの今と先のことを考え、小さな解決を積み重ねていくことが大事。活動をやるためだけでなく、子どもを守るためだ」と強調する。子どもを「取付班」(取材班

・田嶋正樹) 第5部おわり